

マザー・グースと 三匹の子豚たち

桐島洋子



108



108



マザー・グースと
三匹の子豚たち
桐島洋子

文藝春秋

著者略歴

1937 (昭和12) 年東京生まれ。56年都立駒場高校卒業。56～64年文藝春秋に勤務。64年よりフリーのルポライターとして海外各地で取材活動を続け、72年にアメリカ在住の体験を綴った「淋しいアメリカ人」で第三回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。著書に「淋しいアメリカ人」(文藝春秋)「風の置手紙―渚と渚と舵へ」(R出版、角川文庫)「女がはばたくとき」(PHP)「女ざかりの美学」(じゃこめてい出版)「聡明な女性は料理がうまい」(主婦と生活社)「さよならなんてこわくない」(交通公社)等多数ある。

マザー・グースと三匹の子豚たち

定価 880円

1978年4月30日第1刷

1978年7月15日第3刷

著者 桐島洋子

発行者 阿部亥太郎

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3

電話 03-265-1211 (代)

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

© Yoko Kirishima 1978

Printed in Japan

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

目次

私のエミール	7	春が来た	81
後ろ手	13	買い出し	87
どこへ行こうか	19	狩猟採集	93
故郷	25	魚の頭	99
家主	31	われら海の子	105
初登校	37	サマー・キャンプ	111
車はいらない	43	旅暮らし	117
大寒波	49	孟母はどこへ	127
元旦	59	わらべうた	133
百人一首	69	サバイバル	139
最上の教師	75	再会	145

キャンプ生活	151	ベイク・セール	217
親子試合	157	権利	223
マンハッタン	163	パーティー	229
住い	169	個性	235
ヤード・セール	175	子豚の反乱	241
サマー・ドッグ	181	別れ	247
勉強	187	子豚たちその後	253
収穫	193		
ハロウィーン	199		
プロイラー	205		
日本語	211		

装幀 平野甲賀
写真 アーネスト・バロス

マザー・グースと
三匹の子豚たち

私のエミール



P. O. Box 421 East Hampton N. Y.
11937, U. S. A. —これが「私と日本
の現実とをつなぐ唯一の窓口である。人里離
れて住む私の庵は郵便配達の圏外だから、町
の郵便局まで大遠足して私書函を開かなけれ
ば、外界の消息は手に入らない。

郵便物の束をつかみ出すと、私はそのまま
近くの原っぱに駆けて行き、古い風車の下
の日だまりに腰を下ろして、ときには枯れ草に
まみれて寝ころんで、ゆっくりと手紙に読み
ふける。

「あなたは凄い。＼タンマをかけて一抜けた
のできる人だから」

——今日着いたある人の手紙の一節は、ち

よつと私の氣に入つた。

別に妻くはないけれど、たしかに私はタンマをかけて一抜けた。帰りなんいざ、田園まさに荒れなんとす——ここ数年、心身の内部で地鳴りのように高まっていたこの呼び声にやつとこたえて旅立つて、流れ着いたアメリカの田舎町で、この上もなく静かな休暇の日々をいとおしんでいる。

この休暇の目的は、大きく分けて二つある。

一つは、四十代を目前にした私自身の、生命の洗濯と充電である。女の平均寿命七十七年の半分はすでに過ぎたのだ。人生の折り返し点で一休みし、自然の中に身体を伸ばして深呼吸しながら、後半生の方向にじつと心を澄ませてみたい。

それに、あまりにも忙しい日常の中で、知りたいこと、考えたいこと、読みたい本が、押せ押せにたまりたまつて、これ以上放置したら收拾がつかなくなりそうだ。

こんなに不勉強な人間が、いつの間にか「ヒーローロンカ」という世界に類なき奇怪な職業の一味に加わって、あれこれしたりげな発言を続けてきたのは、まことにオソレを知らぬ所業であつた。

子供三人引つ抱えての世渡りに、オソレなど知っていられるかという自己弁護も、いくぶん生活に余裕ができた今では説得力がない。せめてこの休暇の間に、できるだけの勉強をしておこう。勉強などしてなまじモノが視えはじめたらいいよおそろしくて端的な物言いができなくなり、ヒョーロン商売あがったりになるかもしれないが、それならそれでよいではないか。また新しい道がひらけるだろう。小説も書いてみたいし、なにかの研究にのめりこんだりもしてみたい。一度しかない人生の、もう半分しか残っていないのかと思うと、したいことがあり過ぎて、失業なんかちつともこわくない。

もう一つの目的は、家事育児に心ゆくまでいそむことである。ホーム・メイキングという仕事に深く愛着する私は、主婦権を入手に委ねたりしたら、生活の根っこをなくしたように生きた心持がしない。しかし、夫という協力者に恵まれない不運もあって、経済的責任は人一倍重いから、男に伍して、というよりそれ以上に猛烈に頑張って働かなければならない。したがって、主婦業に費やしうる時間や力はかなり限られたものになる。もつときめこまかく家庭を耕したいという欲求不満に、私はいつも苛立っていた。とりわけ、いま育ち盛りの子供たちが生活者としてしっかり根を張るためには、その土壌をできるだけ肥沃なもの

にしておきたい。

私の荒々しい遊牧生活の道連れにされた子供たちは、オンブやダッコの安逸をむさぼるひまなどあらばこそ、物心ついたときから、サッサと手を離して足早に先を行く母親のあとに、一生懸命つき従って来るより他なかったのである。乱暴な放し飼いが幸いほほいいメにて、かなりたくましく自立心の強い子供に育ったが、もちろん必ずしも私の趣味に合うことばかりではない。言葉づかいや行儀作法はひどいものだし、生活の技術や教養の程度も、私の子供時代に比べて格段に劣る。これはすべて、家庭教育の責任に属することだろう。すなわち、親の出る幕なのだ。

そうだ、ときには私も立ちどまって振り向いて、子供たちとバツチリ顔つき合わせ、私の知力と経験と偏見と哀愍とをぶちまけて、思いっきり彼らを鍛えてみよう。そう思い立って、ついに私も「教育ママ」の仲間入りというわけである。

しかし、きびしく子供を鍛えるためには、その優しいクッションになる自由空間が必要だ。コンクリートの壁や、危険な道路や、受験競争の人垣に囲まれた逃げ場のない環境で、それ以上、子供を追いつめるような躰けのムチは鳴らせない。

むかしの私のように、ひろやかな自然の中に解き放たれた子供たちとなら、容赦なくはげしい取っ組み合いができるだろう。また、四季の自然そのものが、すばらしい教師になって、親に力を合わせてくれる。

つまりは「自然にかえれ」ということで、そんなことは二百年も前からジャン・ジャック・ルソーが叫んでいるのだが、人類はこのところ、どうやらその逆に逆にと道を選んでいるようだ。

アメリカに来る道すがら、ルソーの『エミール』を二十年ぶりに読み返した私は、現代の、特に日本の、教育の歪みをもとの見事に見通したルソーの先見性に驚嘆した。

妻い男がいたものだなあ、かなわないなあ、恋人にするのは怖いけど、こういう天才の面倒をみるナントカ・ド・キリシマ侯爵夫人なんていう身分になってみたい。そうしたら荘園の館にルソー先生をお迎えし、わが息子をエミールのように教育していただく。彼がどんなに気むずかしい寄宿人だろうと、私は喜んでサービスにつとめ、彼のお好み通り、野菜と乳製品中心の自然食に腕をふるおう。そのうち、ふと気がついたらもう一人子供が増えていたりして……なんてあらぬことを考えているうちに、飛行機はもうアメリカに着陸し、われ

に返った一介の子連れ狼は、ルソー先生の贅沢な条件にはとても応じきれない私の貧しさにうなだれる。

いや、しかし、私だって彼にイバりたいことが一つはある。女中に次々と産ませた五人の私生児をすべて孤児院の前に捨て、ついに一人の子供も育てなかった彼にひきかえ、私はともかくも三人の子供を自分で育てているのだ。

だから私が、あえてルソーの前に面を上げ、私自身の「エミール」の実践に挑むのも、それほど不遜なことではないだろう。

後ろ手



日本を発つすこし前、私は子供三人引連れて乗ったタクシーで、かなりはげしい衝突事故に遭遇した。ありうべからざる対向車が突然猛々しくフロント・グラスいっぱいに迫って来た瞬間、私は咄嗟に^{とっさ}大手をひろげて両脇の子供たちを抑え「こんな詰らないことで子供を殺されてたまるか」と心で叫びながら「敵」を睨みつけたものだが、そのときふつと「私はいつも後ろ手型だなあ」という奇妙な感慨にとらわれた。

会田雄次先生の『日本人の意識構造』によれば、危難に直面したとき、日本の母親は子供を胸に抱き込み敵に背を向けてヘナヘナとしやがみ込んでしまうが、西洋の母親は後ろ

手に子供をかばい、敵に向かって立ち足ばかり、活路を求めるそうである。この分類によれば、私はあきらかに後者に属する。

なにしろ私はいわゆる未婚の母で、かなり無茶な子産み子育てを強行してきたのだから、いわば毎日が危難の連続で、後ろ向きにしゃがみこんだりしては破滅を待っただけだった。自分の稼ぎで子を養うより他ない母親にとっては、「仕事か育児か」などというあののどかな煩悶も存在しない。

とはいうものの、会社勤めと子育ての両立はむずかしい。オテツダイサンという、中途半端な呼称に似つかわしく頼りない女の子に家の守りを委ねて外に出るのは、ヴェトナム戦線の従軍体験よりもスリリングなことだった。しかも彼女たちはやめたいとなったらもう待ったがきかず、ボタンと即日消えてしまう。せめて後任が見つかるまで待つて、ボタン・タッチをしていこうというほどの責任感さえ持ち合わさないので。

無責任女に子供をほうち出されたからといって、私まで無責任に欠勤するわけにはいらないが、幼い子供を一日中置き去りにしておくのも親として無責任なことだ。仕方なくそろそろと一連隊を率いて横浜から東京へ出勤し、会社に近いホテルのロビーで子供を遊ばせてお